

流動する「境界」

—60-80年代における日韓のメディア空間と文化越境に関する考察—

Floating Borders

-South Korean Media Space and Cross-border Spill-over during the 1960-80s

金 成玟*

Sungmin Kim

1. はじめに

韓国政府が数十年間維持してきた「日本大衆文化禁止」を排除し、その開放を公表した1998年は、中国で起きはじめたいわば「韓流ブーム」が示しているように、韓国に対するイメージがアジアの主なメディア・大衆文化の生産国の一つへと移行しはじめた年でもあった。その背景には、メディア産業の良・質的成長、韓国政府の積極的な文化政策などのシステムの変化だけではなく、メディア大衆文化の生産・消費主体の多大な変化があった。高度経済成長期に青少年時代をおくった新しい世代の若者層が文化生産と消費の主力として浮上したのである。そういった動きは、インターネットといった新しいメディアと混ざり、大衆文化をめぐるあらゆる様式を大きく変化させると同時に、大衆文化の軌跡を通じて韓国社会の文化的アイデンティティの再構築過程を問ううえでも、以前とは異なる新しい感覚を生みだした。

90年代は、周知のとおり、グローバル資本主義に根ざした近代化を背景に出現したグローバル・メディアと若者を中心とした新たな消費層による日本大衆文化のトランスナショナルな消費が東・東南アジア地域内で爆発的に増加しはじめた時期である（岩渕 2001；水越 1998）。それは、トランスナショナルなテレビが出現した1980年代中盤からのグローバルな文脈（Barker 1997；Held & McGrew & Goldblatt & Perraton 1999）を背景にしながら、同時に東・東南アジア地域の国境内の権力の独占と歴史的な特権が失われ、重層的アイデンティティのゆらぎが地政文化的に屈折しつつハイブリッドな空間を形づくっていく過程（姜・吉見 2001：12）でもあった。1998年の「日本大衆文化開放」宣言や「韓流ブーム」で代表されるその後の日韓の活発な文化交流も、そのような歴史的な文脈を共有したものなのである。

*東京大学大学院情報学環

キーワード：文化的国境、テレビ、文化越境、日韓、冷戦体制

90年代以降の韓国の文化論においては、高度成長期のメディア・大衆文化へのノスタルジーを語る人々が急速に増えていくなど、テレビ、映画、広告、ポピュラー音楽といったあらゆるメディア・大衆文化においていわば「復古の嵐」が巻き起こった。それは、「祖国近代化」に動員された公共空間だけが許されていた高度成長期の集团的記憶を個々の記憶として語り直し、私的空間における個人の消費の空間として再構成していく試みであると同時に、軍事独裁政権によってなされたさまざまな抑圧と統制が存在していた60-80年代の高度成長期を、政治的抵抗の次元だけではなく、抑圧とともに存在していた文化的享受と欲求の次元から見つめなおす作業としての意味をもっているようにみえる。漫画、アニメ、ビデオ、ゲーム、ポピュラー音楽など、60-80年代を通して公共空間では禁止されていたはずの様々な日本大衆文化が個人の消費の空間における個々の記憶として語られはじめたのは、抑圧され、公共空間では語られていない「大衆文化」の復元でもあるのだ。

われわれは過去を思い出すのではない
/過去という固定観念を思い出す/ドンナム・シャープ白黒テレビの鉄人28号/宇宙の王子パッピー、そしてパク・ジョンヒ
/その70年代の客観的相関物/僕のすぎ去った夢からはなぜ古いマンガの匂いがするのだろう？¹

ユ・ハ詩「ジャズ7」中²

しかしその活発な動きにも関わらず、日本との文化的関係を通じて構成された60-80年代の

大衆文化に対する社会的議論は、依然として貧弱な水準にとどまっているようにみえる。それは、「国境」が成立し、あらゆる領域における公式的「関係」がはじまっていくなかで、メディア・大衆文化だけがその例外として「禁止」の対象となり、存在と不在、意識と無意識のあいだを行き交う幽霊のような存在として日韓関係の外側に置かれていた「33年間」に対する十分な議論と理解が不在しているからであろう。「日本大衆文化禁止」やその社会的作用を単なる脱植民化（decolonizing）の過程だけにとらえ、そのなかで作動していた感情の構造を強固な「ナショナリズム」としての説明してしまうことで、その33年間の文化的関係はどのように構成され、何を生み出したのかという問いそのものにも光が当てられてこなかったのである。つまりそのなかに共存していた「冷戦体制」や「開発独裁」などの諸歴史的条件とそれらをめぐるさまざまな主体の戦略とまなざし、60-80年のグローバルなテレビ放送の普及期に存在した国際的なメディア現象としての側面とそれをめぐる「境界内」の複雑で重層的な権力関係や規範、屈折した欲望などが看過されているのだ。

したがって60-80年代の日本大衆文化をめぐる禁止と享受の問題は、私的空間で抑圧されていた個々の記憶としてだけではなく、公共空間で共有されていた社会的想像（social imaginary）、つまり共同で行われるさまざまな慣行を可能にし、広く共有される正当性の感覚を可能にする共通理解（Taylor 2004=2011：320）として復元されなければならない。60-80年代の日韓の文化的関係を論じるというのは、

日韓の過去の文化的国境を、トランスナショナルなグローバル・メディアが日常的に消費されている「いまここ」からただ眺めることなく、むしろそれこそが韓国のナショナル・アイデンティティを再検討し、日韓の文化的関係を再構築していく作業として意味をもっているからである。韓国の大衆文化の形成において、日本大衆文化をめぐる作動した感情の構造はいかなるものだったのか。それは強固なナショナリズムであったのか。むしろそれは60-80年のあいだ再構築された、さまざまな抑圧が生みだした複雑な欲望とまなざしではなかったのだろうか。

このような問題意識から、本稿は、「文化的国境」と「文化越境」といった概念を通じて60-80年代日韓の文化的関係がもつ普遍性と特

殊性を検討し、「脱植民的メディア空間」において拒否と否定の対象であった日本大衆文化をめぐる欲望やまなざし、戦略の複雑な作用を、「冷戦的メディア空間」との連続性のうえで把握していきたい。それは、60-80年代韓国社会に存在した日本大衆文化めぐる欲望が「日本大衆文化禁止」そのものによって生産されたものであるという観点から、その禁止と欲望をめぐる作用したさまざまな条件と背景を検討していく作業である。ポスト植民社会でありながら冷戦体制の最前線であった韓国の大衆文化と日常意識では、「日本的なもの」とともに「アメリカ的なもの」をめぐる文化的アイデンティティもが存在しており、その二つがつねに衝突、交錯、矛盾しながら複雑に作用していたからである。

2. 文化的国境としての禁止

2.1 境界とアイデンティティ

本稿で用いている「文化的国境」という言葉は、日本大衆文化をめぐる日韓の関係を、地理的境界を示す「国境」と区別して把握するための概念である。「文化的国境」は、国境地域を中心に、通商、交易、移民、アイデンティティ、文化などの問題を対象とするさまざまな境界研究（Border Studies）によって定義されてきた、「地図上にかかれた線以上の意味をもつ、流動的かつ重層的に構築されるものとしての境界」の意味で理解することができる。この「境界」という概念は、境界を引こうとする集団とそれを容認する集団のあいだに存在するある種の「協約」から生まれるという人類学者フレド

リック・バルト、レイモンド・リーチらの視点を共有するものである。その観点によると、アイデンティティ構築（同質化）の過程で最も優先されるのは、「彼ら」と「我々」とのあいだにつくられる「境界」とそれを維持しようとする「意志」である（Anderson 1997；Cohen 1994；Donnen & Wilson 1999）。

リーチによると、すべての境界は、自然のままでは連続している切れ目のないところに切れ目をわざと入れた人口的な分断である。その境界に内在する曖昧性は、一つのまとまった領域のなかで範疇区別を設けようとするとき、聖なる領域として「タブー」の扱いをうけるが、

その対象こそが「境界の標識」となる (Leach 1976=1981 : 73-76)。したがって分析の要となるのは、バルトによると、境界を構築しようとする意志と集団を定義する民族境界そのものであり、それが内包する文化的内容ではない。境界がどのように構築されていくのかを分析するためには、集団の固定的特徴ではなく、集団の成員が外集団と内集団を主観的に区別するその「動的な過程」に焦点をあてなければならないのである。さらにその境界の内側を構成する構成員は、自分の資格 (membership) を確認するために特定の「文化的特徴」を所有するように求められるが、そこで作用するのが戦略的かつ選別的に文化を用い、集団の境界を維持し、再検討する相互作用のメカニズムなのである (Barth 1969 : 12-15)。

したがって「境界」は、不変のものではない。むしろつねに意味を生産し、ステートの物理的限界を超え、その力を揺るがす文化的風景の一部として (Donnan & Wilson 1999 : 4-5)、アイデンティティを生みだし、ナショナリズムの物語に欠かせないナショナル文化の必須要素として存在する (Anderson 1997 : 4-7)、構築されつづける文化的動きなのである。そのように文化的に構築される境界、つまり「文化的国境」は、教育、メディア、小説、記念館、見物などのようなさまざまな慣行において現れ、物語を通じて人びとの共通の経験、歴史的記憶に関する意識を与えることによって、社会的慣行や言説のなかで構築されるのである (Williams

1997=2004 : 48-49)。

そのように構築された文化的国境は、集団間の関係によってさらに流動する。しかしその「境界」をあいだにおく集団間の関係は、境界と境界内のアイデンティティを害するものではない。バルトによると、それは文化的差異を退色させるのではなく、むしろ集団間の文化的差異を維持する方法として持続し、したがってすべての境界は交流を通じて持続的に刷新され、社会的区画として認識される (Barth 1969 : 16)。社会・経済的または政治的状况におけるすべての変化が境界の変容を生み出すのである (Cuche 2004=2009 : 159)。つまり民族・社会的アイデンティティは、さまざまな「他者」との相互作用を通じて持続的に構築・再構築されていく。その他者とのあいだには、定型かつ強固な一つの境界ではなく、把握しきれない複数の境界が存在するのだ (Cohen 1994)。

したがって「日本大衆文化禁止」といった社会的慣例 (金 2011) を「文化的国境」という概念を通じて把握することは、単なる国民づくりのためのナショナリズムの物語を分析する作業ではない。むしろそれは 60-80 年代の日韓のあいだで持続的に存在していたさまざまな相互作用とそれによって流動的かつ重層的に存在した複数の境界、そしてそのなかで境界維持のために作用していた「メカニズム」の複雑なダイナミズムが生み出したさまざまな制度と実践、言説を把握する作業となる。

2.2 大衆文化における境界

国境をめぐる多くの戦争が示しているよう

に、具体的に領土と文化を強調することで国境

を公式化する「国民国家」の時代において、境界は、実体として国家を代弁する。国家間の境界を引く過程は、文化的・社会的同質化といった国民形成（nation-building）のプログラムを生みだし、国民はそのプログラムに忠誠を表することを強要される（Williams 1997=2004：55-60）。その過程を分析するうえできわめて大きな要となるのは、これまでのさまざまな人類学的成果が示しているように、国家間の領土を確定する国境と、アイデンティティや文化を強調する象徴的境界とを異なるものとして区別することである（Wilson & Donnan 1998：2-6）。

1965年の日韓における国交の成立は、境界と国民形成との関係を明らかにしめすものであろう。日韓の国交は、1965年6月22日、「日本国と大韓民国との間の基本関係に関する条約」を基本に、「財産及び請求権に関する問題の解決並びに経済協力に関する日本国と大韓民国との間の協定」「日本国と大韓民国との間の漁業に関する協定」「日本国に居住する大韓民国国民の法的地位及び待遇に関する日本国と大韓民国との間の協定」「文化財及び文化協力に関する日本国と大韓民国との間の協定」が調印されることで、成立した。

しかしアメリカの極東戦略や政権そのものの政治的目的を優先し、領土、歴史などをめぐる多々の未解決問題とそれらに対する韓国国内の激しい反対を押し切って国交正常化を進めた朴正熙パクジョンヒ軍事政権は、その一方で、日本の文化的浸透を防ぐという課題をたて、その具体的な対策を発表していった。「外国音盤の無秩序なる搬入と普及を禁止する新しい法律」「風俗を害する外国映画及び無秩序なショーなどの公演を

禁止する映画法及び公演法の改正」「外国刊行物を統制する輸入業者の許可制」「外国新聞の国内刊行及び支社設置許可に対する承認制などの制度の整備」「テレビの映画に対する一般映画に準ずる使用許可」「無料公演および接客クラブの公演に対する一般公演に準ずる規律」など、日本大衆文化の流入を「外来風潮の氾濫」として規定し、それを牽制するための法制度を急いで制定・改正したのである³。

同時に朴政権は、「日本の文化的浸透からナショナル・アイデンティティを守るのは、政府の行政力や法制上の力ではなく国民の精神的姿勢」⁴であると強調し、国民の同意や助力を動員するとともに、国家のレベルであらゆる分野での日本大衆文化の浸透を阻止していくことを言明した。いわば「日本大衆文化禁止」が国交成立と同時に日韓の文化的関係における象徴的境界として、国民形成の一方法として作用しはじめようとしたのである。

くりかえして申しますと、民族の良心にしたがわないで、わたくしならびにわが政府が国家の利益およびより有利な条件をみずから放棄して、韓日国交の正常化を急ぐはずは絶対にありえないのであります。国民のみなさんは、そのように無能な政府、背信の政府を、みなさん自信の意志と手によって選出しなかったはずであるということ誇り、また自信と安心をもたれてよろしいかと思います。⁵

しかし国交成立前年に国交正常化反対デモにむけ緊急に発表された朴大統領自らの特別談話

が示しているように、それは憂慮する世論を安心させるための政権の身振りにすぎないものであった。そのような朴政権の公言をあざ笑うかのように、当時日本からのさまざまな「文化越境」の規模は、そのような政治的身振りで押さえられる水準をはるかに越えていたからである。文学、映画、大衆音楽、放送などのメディア・大衆文化や衣食住全般においてさまざまな日本文化が大量に浸透し⁶、50年代からすでに社会問題として注目されていた「密輸入」⁷は、朴政権によって「五大社会悪」として管理されるようになるまでより深刻になっていった⁸。

なにより当時の国家は、そのような日本大衆文化の浸透の問題について部分的に自律をあたえ、黙認しながら、その一方でその規範を利用して国内の大衆文化を統制することで、服従的かつ従順な「国民」を動員しようとした（金 2011：17）。当時、発展主義、民族主義などを主な内容とする朴政権の支配言説は、下からの平等主義的圧力を吸収し、国家主義的に利用しようとしていた。大衆の欲望をすべて抑圧するのではなく、特定の方向へと噴出させ、大衆を同質的集団主体として呼びかけることで社会の民族化、大衆の国民化を追求していたのである（ファン 2004：515）。

3. テレビの拡散と文化的国境

3.1 60-80年代におけるテレビ

ナショナリズムが独裁政治によって動員されるなかで「禁止」の文化政治が「黙認」の文化政治と化していく過程を把握するためには、そ

実際国交正常化後の「日韓」は、経済のみならず、政治、軍事、文化などあらゆる分野で密着しはじめ（ソ 1995：38）、学者、芸術家、言論人などの人的水準においても幅広い交流が開始されていた⁹。さらに日本の資本による経済発展を通じて政権の正統性を補完することはきわめて重要な課題としていた背景（ジョン 2002：137；ソ 1995：47）を考えると、日韓の文化的関係は、大衆文化の水準のみが例外的に排除される形で築かれていった。したがって「日本大衆文化禁止」は、外部の敵対者とのあいだに境界を構築する過程、つまり小規模な政治体がつねにもつ、より大規模な政治体とくに近隣の政治体によって文化的に吸収されてしまうことに対する恐怖（Apadurai [1990] 1996：60；Smith 1991=1998：28）のような感情の構造が作用する、普遍的なアイデンティティ政治（Morley & Robins, 1995: 46）としての性格を持つ一方で、「境界内」でさまざまな政治・社会的条件と背景が作用する特殊な現象でもあった。目に見えない文化的国境をめぐる社会的想像として、つまりある特定の時期に特定の社会集団がよどみなく遂行できるような、境界内の集合的行為（Taylor 2004=2011: 34）として作用したのである。

の禁止と黙認の対象であった「文化越境」そのものとそれをめぐる集合的行為、そしてその行為を可能とする背景がもっていた普遍性と特殊



온가족이 함께 모여앉아 화면도 선명히 보이는 일본텔레비전만화로
보고있는 시청자들. 일본글씨가 뚜렷히 보이고 말도 잘들린다.
<한문과기자회견>

図1 日本のテレビ番組を視聴する釜山の家庭¹⁰

性を区分して把握する必要がある。それは、禁止を違反して存在した文化越境においてもいえることである。韓国における日本大衆文化の越境も、ナショナリズムによる強固な境界のみを想定した場合はきわめて特殊な現象としてみることができるが、実際60-80年代のグローバルな動きのなかで考えると、日韓関係の特殊性だけでは説明できない現象だったからである。

解放後の「脱植民的メディア空間」におけるもっとも重要な命令であった日本大衆文化に対する否定は、単純に植民地時代の残滓を除去することで遂行できるような性格の作業ではなかった。日韓間の地理的条件が生みだした文化越境は、そのような作業だけでは防ぐことのできない、つねに流れるものであり、つねに存在するものであったからである。とくに韓国のテレビ放送が開始された60年代以降70-80年代に

は、近代化の尺度として認識されていた「テレビ」の普及が経済成長とともに急増し、産業としてのテレビが急成長することで、日本の「放送電波」の直接的越境と模倣、翻訳、剽窃などの間接的越境が同時に出現した。日本の電波が到達する地域では直接的視聴が行われ、中央のテレビ放送界では日本の放送をモニターし、番組のフォーマットや構成、内容などをそのまま模倣、剽窃する「慣行」が定着したのである（金 2010：250）。つまり「脱植民的メディア空間」で公的に命令された「日本大衆文化禁止」が、実際は私的かつ非公式的領域ではさまざまな形で違反され、否定の対象であった日本大衆文化は、韓国の大衆文化や日常意識のなかに根強く浸透していったのである。

そういった日本大衆文化に対する禁止と享受、黙認の文化政治が作用した60-80年代は、

西洋全体の経済成長を通じてテレビ放送が急成長した時期である。戦後におけるナショナルな語りの中核を占めていた日本のテレビのように（姜・吉見 2001：129）、第二次世界大戦後の（日本を含む）欧米先進国において、国民国家の政治的公共圏と新たな文化産業として、ナショナルな文化的アイデンティティの救心として、さらに集団的生活とナショナルな文化を構成する中心的なメカニズムとして作用したのは、テレビであった（Morley・Kebin 1995：10）。そして1958年の千五百万ドルから1973年の1億3千ドルまで増加したアメリカのテレビ番組の海外販売収入や（Herman・

3.2 グローバルな現象としての電波越境

そのような「テレビの拡散」は、新世界情報通信秩序（NWICO）と不平等性の概念、メディアの民主主義への役割をめぐるグローバルな論争を生み出した。多くの非西洋社会または周辺社会において、テレビの電波は、単なるグローバルな現象とは異なる、直接的な経済・文化的支配が行われる「国境」の次元における、脱植民化や文化的アイデンティティの問題として浮上したのである（Barbrook 1992；Collins 1990）。

カナダが経験してきたアメリカ放送の電波越境（cross-border spill-over）をそれ自体で一つのグローバルなものとして捉えるコーリンズの指摘のように（Collins 1990）、本稿が日韓における文化越境の主な現象としてとりあげた「電波越境」は、60-80年代の国際的な「テレビの拡散」においては、普遍的な性格をもつ現象でもあった。国民国家の内部で文化的コミュ

McChesney 1998：20）、各国におけるテレビ放送の開始時期、衛星コミュニケーションの急速な発展などが示しているように、60年代以降、国民国家のシステムとトランスナショナルなテレビの発展の両方を包括する制度的水準で現れるグローバルな現象（Barker 1997）としての「テレビの拡散」がはじまった。その過程は、比較的に周辺的位置にある多くの国においては、アメリカナイゼーションなど一方向的なトランスナショナル文化フロー（Collins 1990：4）として問題化され、さまざまな議論と戦略を生み出した。

コミュニケーションのプロセスやアイデンティティの強化に貢献するテレビ放送システムは、国によっては地理的かつ歴史的な理由で他の国より困難な状況に置かれていたのである（Howell 1980：225）。

カナダ放送とともに西洋において電波越境の代表的事例としてとりあげられるのは、アイルランドのテレビ放送である。両国の放送システムの形成及び成長の過程において、地理的かつ文化的により大規模な政治体であるアメリカとイギリスの経済的かつ文化的に影響の下に置かれてきたからである。実際テレビ放送の電波越境という形で存在した文化越境は、カナダとアイルランドにおける文化的アイデンティティの問題においてきわめて重要な現象として、放送の法制度、システム、技術、番組、放送理念などの形成に多大な影響をおよぼした。ハウエルは、この二つの電波越境を分析する対象とし

て、1) プログラムサービス、2) 規制のメカニズム、3) 放送に関する法制度、4) 外国文化の浸透への対抗措置に関する公式的認識を提示している (Howell 1980 : 225-226)。

カナダのテレビ放送の形成期において、アメリカとの地理的距離はもっとも深刻な問題であった。越境してくるアメリカ放送の情報と娯楽がカナダの文化的資源と創造的能力、情報のソースなどに対して大きな脅威として存在した。実際視聴可能な地域の住民は60年代からすでにアメリカの商業放送を積極的に視聴し、設置が増加したCATVを通じてさまざまなアメリカの放送番組が浸透するなど、カナダ放送がアメリカ放送のネットワークの拡大に凌駕されてしまう恐れに対する恐怖が国家の水準で広まっていったのである。そのような背景は、1968年に制定され、東から西への文化的流れを促進し、南から北、つまりアメリカ放送の越境を防ぐことを主な趣旨としていた放送管理法とCRTC (Canadian Radio-Television Commision) の厳格な輸入制限が示すように、「カナダのコンテンツとはないか」という明確な定義が不在のまま、ナショナル・アイデンティティを守ると同時にアメリカ放送と競争し、視聴者を確保していくためにはなにをすべきかという課題にもとづいた、保護主義的な放送規制政策を生みだした (Ramanow 1976 : 26-30)。

つまりカナダのテレビ放送における二つの課題、ナショナル・アイデンティティをつくりあげる政治的手段としての課題と経済的利益を生み出す商業的機関としての課題は、アメリカからの電波越境が生みだしたものであるとって

も過言ではないのである。このような歴史的文脈は、国家と市場がアメリカからの文化越境に対して強固で厳格な姿勢を維持していく条件となった (Collins 1990 ; Filion 1996)。

アイルランドにおいても、イギリスBBS放送の電波越境は、直接・間接的な経済・文化的支配が行われる「国境」をめぐる脱植民化とアイデンティティの問題、メディア産業の発展と近代化の問題が矛盾、交錯する空間として捉えられてきた (Watson 2003 ; Corcoran 2004)。とくに700年というきわめて長い植民地時代を経験したアイルランドは、伝統的にイギリスからの文化的帝国主義に対する保護主義を堅持した。カトリック教会はナショナル・アイデンティティの確立方法として映画と文学に対する強力な統制と検閲を行い、放送を独占してきた「RTE」は、1960年に制定された放送法の下でアイルランド語を回復し、民族文化やカトリック文化を保護、発展させるという民族的目標を遂行するメディア機構として機能した (Barbrook 1992)。

そのような文化保護主義に亀裂が生じたのは、60-70年代にかけて果たした高度経済成長であった。70年代にすでに半分以上の人口が都市地域に移動するほど都市化が急速に進み、電波越境したイギリスのテレビ放送を享受できるようになった東北地方の住民を中心に商業放送に対する要望が急速に増加したからである。多くのアイルランド人は、海外先進国の番組が放映されること自体に近代化を実感し、その結果60年代に個人のケーブル業者が家庭内でイギリス放送のシグナル受信用のネットワーク設置サービスを開始して以来、80年代にはヨー

ロッパでもっとも多いケーブル利用者を確保した国となった。同時にアイルランド文化の保護を通じて国民形成に大きな役割を果たしていた「RTE」にとっては、電波越境してくるイギリスのテレビ放送と競争し、視聴者を確保することが最大の課題として浮上した。結局60-80年代、視聴者確保といった課題を優先せざるをえなかった「RTE」は、アイルランド語放送を減らし、商業化を進めていった。つまりアイルランドにおいて、イギリス放送の電波越境は、アイルランドの経済開放とテレビ放送の商業化双方において絶対的影響をおよぼす条件として作用したのである（Barbrook 1992：208-210）。

60-80年代の「テレビの拡散」は、国際的な文化越境をグローバルな規模で生み出した現象であった。それは国家間の国境を形成していくなかで構築されていった文化的関係であったという点で、90年代以降のトランスナショナルなグローバル化とは異なる現象として捉える必要がある。第二次世界大戦後の

国民国家形成期において、西洋から非西洋へ、中心から周辺へと拡散しはじめたマスメディアは、共同体間の文化的国境の形成に多大な影響をおよぼし、韓国、カナダ、アイルランドの人びとが経験したように、戦後の世界を想像させ、さまざまな欲望とまなざし、戦略を生みだし、身につけさせてきた。

アブルゴットが指摘しているように、テレビを真剣に考えるというのは、文化を、意味の体系や生活様式としてみるだけではなく、その諸要素が生産され、統制されながら「国家の境界を越えて伝播されるなにか」として考えるということの意味する（Abu-Lughod 1999=2003：244）。つまりこのような文化越境は、グローバルな経済成長やメディアの発展が「境界内」の集合的行為や感情の構造を生み出す文化的現象としてその普遍性をもつ。そしてその普遍性のなかで、各共同体は、各自の特殊な歴史的条件のうえで特殊な欲望とまなざし、戦略を構築させていくのである。

4. 冷戦的メディア空間における日韓

4.1 アメリカナイゼーションと日本大衆文化

吉見が指摘しているように、戦間期からアメリカを身近な欲望の対象として消費していた東京や大阪などの大都市の日本人にとって、「日本的なもの」と「アメリカ的なもの」は、対立するものではなく、大衆文化や日常意識のレベルでは連続性を内包しているものであった。それは植民地時代から東京や大阪のモダニズムと同時代的なアメリカが日常の文化風景に入り込

んでいたソウルでも、同じくいえることである（吉見2002：9-16）。解放後になると、「アメリカ的なもの」はさらに直接的な経験と力として韓国の大衆文化や日常意識に入り込んでいった。首都のソウルをはじめ、全国に米軍基地が建設されていくなかで、国境の内部空間に存在する境界を越えて越境してくるアメリカ文化は、拒否はもちろん交渉すらできない絶対的な

歴史的条件だったからである。

その「冷戦体制」と「アメリカ」といった二つの条件が生みだした「冷戦的メディア空間」は、米軍放送（AFKN）と米8軍の慰問舞台など、アメリカナイゼーションの直接的な手段としてのメディアと都市風景だけではなく、メディアの規範と様式が、冷戦という極端な条件のなかで命令、規定される空間として機能した。したがって「日本大衆文化」をめぐる欲望やまなざし、戦略の複雑な作用をとらえていくには、「脱植民的メディア空間」における制度や実践、言説や実践がそのような「冷戦的メディア空間」と「アメリカ的なもの」との連続性のうえでどのように遂行されたのかを把握する必要がある。そもそも、「日韓国交正常化」の成立過程が示しているように、冷戦体制においてもっとも近い「友邦関係」であった日韓の文化的関係は、アメリカを除いては語られないのである。

1945年の解放と同時に韓国社会に多大な政治的かつ文化的影響をおよぼすヘゲモニー勢力は、准帝国の日本から超帝国のアメリカへと移行した。同時に植民地の生活様式はさまざまな方法で処分され、新しい世界のシステムがつくりだすフレームに合わせて加工されていった（キム 2007：312）。とくに韓国の統治主体として登場した米軍政は、禁止による排除のメカニズムを通じて韓国の大衆文化を統制しはじめた。その禁止の主な対象は「共産主義」であった。「共産主義」や「北朝鮮」とのあいだの境界が完全に封鎖（containment）されていくなかで（Cumings 1983）脱政治化され、保守化されていった韓国の大衆は、アメリカと

アメリカの生活様式を強烈に欲望していったのである（ヨム 2008：443-449）。

しかし前述したように、「日本大衆文化」が徹底的に否定されることはなかった。解放後の韓国の大衆文化と日常意識では、「植民地」と「冷戦」といった二重の近代的な抑圧のメカニズムが交錯し、衝突した。大衆は、身体の内側に刻まれていた日本化の痕跡はそのまま内蔵しながら、同時に朝鮮戦争後の米軍政下で「アメリカナイズ」しようとする欲望を強く表していた（リ 2008：388）。とくに日常生活の水準で日本が享受していた「豊かな西洋式」の生活様式は、憧れていたアメリカに近づくための現実的なモデルでもあった。アメリカが、欲望はしても実現するにはあまりにも遠い存在であったとすると、アメリカナイズされた日本は、参考と模倣が可能な実質的なモデルとして存在していたのである（キム 2007：357）。

「日本的なもの」と「アメリカ的なもの」をめぐるそういった欲望とまなざし、戦略は、そのまま「冷戦的メディア空間」へと吸収されていった。反共主義/自由民主主義にもとづいた文化的検閲と訓育が大衆文化と日常意識を抑圧する「冷戦的メディア空間」のなかで、「日本大衆文化」は「アメリカ的なもの」とともにつねに欲望され、享受されていった。「冷戦的メディア空間」において、日本は、旧植民者ではなく冷戦の友邦であり、「日本大衆文化」は、防ぐべき文化的帝国主義ではなく北朝鮮との体制競争に勝つための模倣すべき近代化のモデルであったからである。つまり「脱植民的メディア空間」においてもっとも重要な課題であった日本とのあいだの文化的国境の構築は、

「冷戦的メディア空間」においては、優先的課題でもなければ、実現可能な規範でもなかった。米軍基地を中心とした圧倒的なアメリカナ

イゼーションをまえに許されていたのは、冷戦体制の秩序に服従する欲望とまなざし、戦略だけだったのである。

4.2 二つの文化越境

解放後の韓国社会でもっとも強力な文化的ヘゲモニーとして作用したのは、米軍基地を中心とした圧倒的なアメリカナイゼーションであった。放送においては、3年間の米軍政を通じてアメリカ方式の放送運営原理が導入され、アメリカ放送の技術と装備が放送の標準となり、アメリカの番組編成と政策原理が韓国放送の根源となっていく（カン 1997：41）。とくに米軍への放送サービスを主な目的とする米軍放送、「AFKN（American Forces Korea Network）」の影響は、韓国放送史においても絶対的なものであった。グローバルな米軍放送ネットワーク「AFRTS（Armed Forces

Radio and Television Service）」の一支局であった「AFKN」は、全国的ネットワークを構築し、57年からテレビ放送を開始した。それは、50年代の非共産主義陣営で放送発展を主導したアメリカ放送システムの拡大であり、アメリカの軍事、政治、産業といったあらゆる分野を横断しながら形成した複合コミュニケーション・システムが非共産諸国の放送システムに浸透していく過程（Williams 2003：34-35）として捉えることができる。

「AFKN」のテレビ放送は、軍事的放送制度と一般の放送制度との曖昧な境界（Williams 2003：34-35）のうえで消費された。放送初

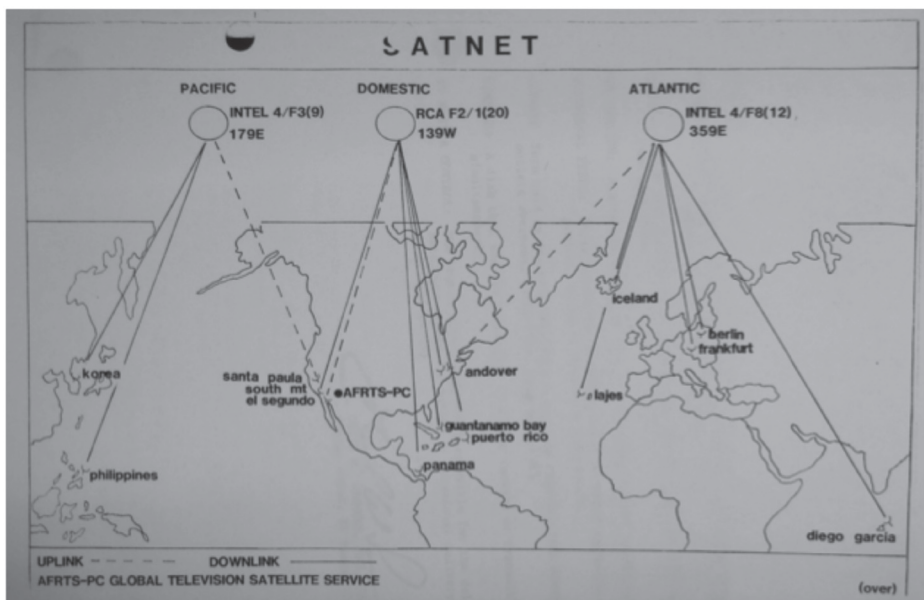


図2 60年代、米軍が作成したAFRTSのネットワーク図¹¹

期から米軍基地とともにアメリカの大衆文化が浸透する主なルートとして認識されていた「AFKN」は¹²、その一方でそのチャンネル設定がテレビの設置の常識として紹介されるなど¹³、日常的メディアとして定着していた。米軍のPX (Post Exchange) を通じて流入してきたアメリカのタバコやウィスキー、コーヒ、コカコーラのように、アメリカで流行っていた最新の音楽や映像が「AFKN」を通じて「越境」したのである。

駐韓米軍のAFKNは24時間の放送時間中、20時間以上をアメリカのポップを流している。ソウル光化門中心部にあるあるレコード屋では、米軍系統で、一週間に200枚の新しいレコードが売られる。AFKNとともに米軍PXから流れたアメリカ国内のヒット曲が米軍と軍部隊の韓国人、洋夫人たちを通じて流れた。「PX文化」という言葉がつくられ、アメリカのポップソングをコピーした安い海賊版レコードが出回っている。¹⁴

AFKNのカラー放映比率が50%を越えており、一部韓国人家庭でも視聴率が増加している。文公部は、現時点でカラーテレビの視聴現象は適切ではないという判断から、外務部を通じてカラー放映比率を30%に下げたことを以前から非公式的に要請してきた。¹⁵

当時の文化資本の格差や外国の文化に対するさまざまな制限などを考えると、「AFKN」

は、一般の人びとにとってもっとも簡単に外国の先進的な大衆文化を接する機会を提供するメディアでもあった。グラミー賞やアメリカンフットボールなど、韓国国内でも人気の高い番組の場合は、視聴者から直接要請の声が寄せられたり、放映時期をめぐって韓国のテレビ放送と「AFKN」が調整を行ったりすることも多々あったという¹⁶。日本大衆文化の享受は禁止される一方で日本語の学習は奨励されるなど、日本に対する態度が利害によって極端に分離されていた当時、アメリカに対する欲望は露骨に現れていったのである。刺激的な内容の外国映画や日本の映画やアニメなど、国内放送では放送が禁止されていたプログラムが「AFKN」を通じて放送される場合も多々あった。韓国の日常生活に内包されてはいるものの、米軍のための放送に対し韓国の政府が実質的な統制を行うことは不可能な状況だったからである。

AFKNの深夜放送では、あまりの性的描写を理由にわが国ではその輸入が禁じられていた映画もすでにいくつか放映され、夏には日本の映画「羅生門」も公開された。駐韓国連軍用のテレビ放送であるため、その編成を問題化することはできない。このような状況を保護者たちが考慮し、慎重なチャンネル選択を通じてAFKNのなかでも教育的価値がある優秀なプログラムだけを選んで視聴させる知恵が必要である。¹⁷

つまり「アメリカ的なもの」が獲得していた特殊な地位が、日本大衆文化の越境のルートと

して間接的に作用した事例もあった。韓国の地上波テレビ放送で、多くの日本のアニメが「アメリカ産」として放映されていたのである。

韓国テレビにおける子供番組は、荒唐無稽な冒険を素材とした米国産浪漫映画に圧倒されている。たとえば「マジンガーZ」「西部少年チャドリ」「遊星画面ピーター」（以上MBC）「宇宙三銃士」「トルトリ探検隊」（以上TBC）などがこのような類型に属する。（中略）韓国の子供たちが米国漫画映画の主人公と自分を一致させながら現実との心理的距離を遠くすると、韓国の子供としての主体性を形成しにくいのである。¹⁸

「日本的なもの」の越境が私的かつ非公式的な空間における現象であったとすると、「アメリカ的なもの」の越境は、公的かつ公式的な空間における現象であったといえよう。その二つの空間は、「冷戦的メディア空間」のなかで交錯し、共通の経験と記憶として蓄積されていた。多くの韓国人にとって米軍PXが「ディズニーランド」であったように（キム 2008：132）、独裁政権の統制や抑圧を経験していた

当時の若者たちにとって、公的・私的空間で経験するさまざまな文化越境は、抑圧によってさらに生産された文化的欲望を投影させる噴出口でもあったのだ。

僕はアメリカ版ボール紙小説/ヒューマンダイジェストで英語を勉強し/海賊版レコードでさえ、消された禁止曲だけを愛唱した/僕の領土だった同時上映館の臭いと、ブルーライト・ヨコハマ/ちんぴら、学校の壁の穴と世運商街セウンサンガのハコバン/僕はすべての違反を愛し、捨てられた侮蔑や隠語だけを愛した。

ユ・ハ詩「セウン商店街キッズの恋3」中¹⁹

つまり韓国社会が「日本的なもの」と「アメリカ的なもの」に対して維持していた相反する文化的関係は、その二つが交錯、矛盾するテレビ放送やPX、海賊版、音楽喫茶などの空間で重層的な欲望とまなざし、戦略として破片化し、拡散していった。60-80年代の大衆文化や日常意識のなかで構築されていた文化的アイデンティティは、抑圧された公共空間での経験や記憶だけでは捉えられない、破片化した欲望とまなざし、戦略だったのである。

5. おわりに

「社会的想像」を、人が自分の社会的な実存について想像する方法、他の人たちと協調していく方法、人びとの想像力を働かせる方法、規範的な水準で想定される期待、その期待の下に潜むもっと深い水準の規範的な概念と

イメージとして定義するのであれば（Taylor 2004=2011：31）、他者の文化に対する境界を構築していくうえで、その社会的想像はどのように形成されていくのであろうか。流動的かつ重層的な境界とそれをまえにした共同体内で作

用する複雑な慣例はどのような権力と主体によってどのように遂行されるのであろうか。そのような社会的想像と慣行が生み出したのはいかなるものであろうか。

本稿は、そのような観点から、「文化的国境」と「文化越境」といった概念を通じて60-80年代日韓の文化的関係がもつ普遍性と特殊性を検討し、「脱植民的メディア空間」において禁止の対象であった「日本大衆文化」をめぐる欲望やまなざし、戦略の複雑な作用を、「冷戦体制」という圧倒的条件と「アメリカ」という絶対的他者が作用する「冷戦的メディア空間」との連続性のうえで述べてきた。「日本大衆文化禁止」と日本大衆文化の越境といった矛盾した二つの現象を両立させたもっとも重要な条件の一つは「冷戦的メディア空間」であったからである。

前述したように、「脱植民的メディア空間」と「冷戦的メディア空間」は、開発独裁による発展主義といった強力なイデオロギーと交錯し、解放後の韓国の大衆文化と日常意識において一つの強固な抑圧として作用した。60-80年のあいだに存在したさまざまな欲望とまなざし、戦略は、まさにその抑圧が生み出したものなのである。その一つの重要な要素であった「日本大衆文化」の越境は、旧植民地支配者で

ありながら近隣の大規模な政治体の文化的浸透でもあれば、高度成長とともに経験したグローバルな規模のインターナショナルな文化越境の一現象でもあった。その「日本大衆文化」は、恐怖と不安を抱えさせる敵対者の文化でもあれば、北朝鮮との体制競争で勝ち、憧れていたアメリカに近づいていくための模倣すべき近代化のモデルでもあった。つまり33年間「日本大衆文化禁止」といった文化的国境を維持させた社会的想像は、ある大きな集合的行為や感情の構造ではなく、むしろ複雑に破片化した欲望とまなざし、戦略によってつねに構築されつづけてきたものとして説明されなければならない。

したがって、韓国の大衆文化をめぐるナショナルな実践と言説に投影されている「いまここ」の過剰な欲望とまなざしは、単なる被植民者として歴史的条件によって数十年間維持されてきた単純で強固なものではない。むしろそれは、脱植民化（Decolonization）と冷戦体制の力学（Americanization）、そして開発独裁が動員した発展主義（Modernization）などの歴史的条件が作用するなか、二つの絶対的な他者の大衆文化をめぐる構築された流動的かつ重層的な文化的国境とさまざまな抑圧が生み出した、動きつづける欲望とまなざしなのである。

註

- ¹ 当時韓国の地上波テレビでは、禁止されていた日本のアニメーションが放映されていた（金 2008 参照）。この誌のなかの「宇宙の王子バピー」のオリジナル・タイトルは「遊星少年バピー」である。
- ² ユ・ハ、1995、『世運商街キッドの恋』文学と知性社、104-105
- ³ 「韓日國交對備策成案」『東亜日報』1965年7月3日
- ⁴ 『東亜日報』1965年8月17日
- ⁵ 「長い眼で大局を展望しよう—一九六四年・三・二六、韓日会談に関する特別談話」『朴正熙選集3—主要演説集』鹿島研究所出版会、66。

- 6 「日本文化の大量浸透、頭から相槌」『朝鮮日報』1965年3月11日
- 7 『朝鮮日報』1958年9月12日
- 8 『朝鮮日報』1965年1月1日；1966年12月17日；1967年7月22日
- 9 『中央日報』1968年1月12日
- 10 「南TVで日本映像が流行」『東亜日報』1974年1月17日
- 11 NARA RG 330 Armed Forces Radio and Television Service Histories, Reports, and Program Records 1942-1992, Box 31
- 12 「8月のディスク、浄化されていく大衆歌謡」『東亜日報』1961年8月15日
- 13 「TV」『毎日経済新聞』1972年8月18日
- 14 「韓国と米国「百年之交」を越えて (99) ポンチャク歌謡退潮させたポップソング」『東亜日報』1978年10月10日
- 15 「カラーテレビ放映減らすよう政府、AFKNに要請」『東亜日報』1978年2月24日
- 16 「多数の青少年たちがAFKNを視聴」『TVガイド』1982年9月25日；「同じ番組先に放送してはいけぬ」『TVガイド』1984年3月31日
- 17 「成人視聴用に厳しい制動を」『京郷新聞』1974年12月11日
- 18 「西部少年チャドリ (荒野の少年イサム)」 「遊星画面ピーター (遊星假面)」 「宇宙三銃士 (ゼロテスター)」 「トルトリ探検隊 (冒険ガボテン島)」：括弧のなかは原作名。『中央日報』1975年10月18日
- 19 ユ・ハ、1995、『世運商街キッドの恋』文学と知性社、104-105。

参考文献

- Abu-Lughod, Lila, 1997, 'The Interpretation of Culture (s) after Television', Ortner, Sherry B. (edit.) *The Fate of Culture: Geertz and Beyond*. (=1999、キム・ウヨン訳『文化の宿命』実践文学社、219=262) (韓国語文献)
- Anderson, Malcolm, 1997, *Frontiers: territory and state formation in the modern world*, Polity Press.
- Appadurai, Arjun, 1990, *Modernity at Large : Global Dimension of Globalization*, the Regents of the University of Minnesota
- Barth, Fredrik, 1969, *Ethnic groups and boundaries: the social organization of culture difference*, Waveland Press.
- Barbrook, Richard, 1992, 'Broadcasting and national identity in Ireland', *Media, Culture & Society* 14, 2, 203-227.
- Barker, Chris, 1997, *Global television: an introduction*, Blackwell Publishers.
- Collins, Richard, 1990, *Culture, communication, and national identity: the case of Canadian television*, University of Toronto Press.
- Corcoran, Farrel, 2004, RTE and The Globalisation of Irish Television, Bristol: Intellect Books
- Chris, Williams, 2004, 'On the Razor's Edge: Understanding Borders in Modern History'. (=2004、キム・チヘ訳「辺境からから眺める—近代西ヨーロッパの国境と辺境」『近代の国境/歴史の辺境—辺境から歴史を眺める』ヒューマニスト、39-71。) (韓国語文献)
- Cuche, Denys, 2004, La notion de culture dans les sciences sociales, La Decouverte. (=2004、イ・ウンリョン訳『社会科学における文化概念—社会学と人類学を中心に』ハンウルアカデミー (韓国語文献))
- Cumings, Bruce, 1983, Introduction: The Course of Korean—American Relations, 1943-1953, Cumings, Bruce (ed.) *Child of Conflict: The Korean-American Relationship, 1943-1953*, Seattle & London: University of Washington Press, 3-55.
- チョ、ギュチョル、1999, 「大衆消費財としての反日民族主義」『社会批評』21号、119-128。 (韓国語文献)
- Filion, Michel, 1996, 'Broadcasting and cultural identity: the Canadian experience' *Media, Culture & Society* 18, 3, 447-467.
- Herman and McChesney, 1997, *The Global Media*, London : Victor Gollancz Limited
- Howell, W.J., 1980, 'Broadcast spillover and national culture: Shared concerns of the republic of Ireland and Canada' *Journal of Broadcasting* 24, 2, : 225-239.
- 岩淵功一、2001、『トランスナショナル・ジャパン』岩波書店
- 姜 尚中・吉見俊哉、2001、『グローバル化の遠近法—新しい公共空間を求めて』岩波書店
- カン・デイン、1997, 「韓国放送70年の政治・経済的特性」社団法人韓国放送学会編『韓国放送70年の評価と展望』コミュニケーションブックス、13-48。
- キム・ドクホ、2008, 「韓国の日常生活と消費の米国化問題」キム・ドクホ・ウォン・ヨンジン編『アメリカナイゼーション—解放

- 以降韓国での米国化』ブルンヨクサ、122-158。
- キム・エリム、2007、「1960年代中後半における開発ナショナリズムと中産層家庭ファンタジーの文化政治学」『現代文学の研究』第32集、2007年7月、339-375。
- 水越 伸、1998、「アジアのメディア、メディアのアジア—メディア論の視座を再考する」嶋田厚、柏木博、吉見俊哉編『情報社会の文化3—デザイン、テクノロジー、市場』東京大学出版部、199-226。
- Leach, Edmund、1976、*Culture and Communication: The Logic by which Symbols Are Connected*, New York: Cambridge University Press. (=1981、青木保・宮坂敬三訳『文化とコミュニケーション』紀伊國屋書店。)
- イ・ドンヨン、2008、「植民地内面化と冷戦期青年主体の形成—1945-50年代における青年文化の特異性研究」聖公會大東アジア研究所編『冷戦アジアの文化風景1—1940-50年代』現実文化、385-407。
- Morley, David and Robins, Kevin、1995、*Spaces of identity: global media, electronic landscapes and cultural boundaries*, Routledge。
- Romanow, W.I.、1976、'A Developing Canadian Identity: a Consequence of a Defensive Regulatory Posture for Broadcasting', *International Communication Gazette* 22、1、26-37。
- Sepstrup, Preben、1989、'Research into International Television Flows: A Methodological Contribution', *European Journal of Communication* 4、4、393-407。
- Taylor, Charls、2004、*Modern Social Imaginaries*, Durham: Duke University Press. (=2011、上野成利訳『近代—想像された社会の系譜』岩波書店)
- Watson, Larfhlaith、2003、*Broadcasting in Irish: Minority Language, Radio, Television and Identity*, Dublin: Four Courts Press
- Williams, Raymond、1974=2003、*Television: Technology and Cultural Form*, Routledge
- Wilson, T.M. & Donnan, H.、1998、*Border identities: nation and state at international frontiers*, Cambridge University Press
- 吉見俊哉、2002、「冷戦体制とアメリカの消費—大衆文化における戦後の地政学」『冷戦体制と資本の文化-1950年代以降1』岩波書店、3-62。
- ヨム・チャンヒ、2008、「日常の再編と欲望の微視政治学」聖公會大東アジア研究所編『冷戦アジアの文化風景1—1940-50年代』現実文化、409-457。



金 成政 (きむ そんみん)

1976年2月韓国・ソウル生まれ

【専攻領域】メディア・文化研究、東アジア文化論

【主たる論文】

「禁止とメディア—1970年代韓国社会における日本大衆文化禁止と新聞・放送」『マス・コミュニケーション研究』72、2008年

「ローカルな禁止とグローバル化の力学—1980年代韓国における日本大衆文化禁止と国際著作権問題」『年報社会学論集』22、2009年

「禁止と越境—50-70年代韓国釜山における日本の電波越境 (spill-over) 現象の文化的意味」『マス・コミュニケーション研究』76、2010年

「文化的国境と想像された禁止—50-60年代韓国大衆文化における優色の文化政治」東京大学大学院情報学環紀要『情報学研究』81、2011年など。

【所属】東京大学大学院情報学環助教

【所属学会】日本マス・コミュニケーション学会、関東社会学会、日本社会学会、ESA など

Floating Borders

-South Korean Media Space and Cross-border Spill-over during the 1960-80s

Sungmin Kim*

Abstract

This paper examines the notions and historical conditions and the process of cultural reconstruction of cultural relationship between postwar Japan and Korea. Through the concept of cultural border and cross-border cultural flows, this research investigates universality of cultural relationship between Japan and Korea during the 1960-80s. In addition, this research shows that Korean's gaze, the desire for "Japanization", has been the subject of the negation even though its strategies are considered a part of a continuum of decolonizing media space and "Americanization".

Korean's attempts to build a cultural border(not a geographical one) by social imaginaries turned out to be an universal effort that seized upon the fear of cultural penetration of polity of larger scale that are nearby, previous governor of colony. For instance, the cases in Canada and Island illustrate 'television diffusion' similar to those used in Korea from the 1960s to 1980s; This phenomenon that demonstrates various forms of violation and enjoyment of social norms that depicted the universality of international cultural flows. Furthermore, this paper focuses on how "Americanization" had a strong influence on Korean pop culture, everyday consciousness along with "Japanization"; "Americanization", which was expanded by one of the terrestrial channels in Korea where U.S. military bases were built throughout the whole country, AFKN (American Force Korea Networks), and by the culture of eighth US army, was the most significant element forming Korean cultural identity.

Taken as whole, this paper indicates the cross-border spill-over of "Japanization" by looking at diverse discourses on media including the broadcasting review regulations. It also examines how "Americanization" and "Japanization" were clashed, contradicted, and interwoven with each

*Interfaculty Initiative in Information Studies, the University of Tokyo

Key Words : Cultural Border, Television, Spill-over, Japan-Korea, Cold War System

other within Korean pop culture during the 1970-80s. In other words, one of the distinctiveness about the cultural relationship between Japan and Korea had was produced by 'postwar media space' .